

ひびき

歴史回廊

第9部・再考 厳島合戦 ⑥

弘治元(一五五五)年九月二十一日、陶晴賢は軍勢を率いて厳島に上陸、宮崎山(今堀尾・五重塔あたり)に本陣を構えた。

厳島は経済的・軍事的重要性を持つており、戦国の動乱の中で度々争奪の対象となっていた。陶自身も天文九(一五四〇)年、尼子軍に包囲された郡山城を救援した際、岩園から厳島に渡海し、広島湾を横切つて海田に上陸している。周防から安芸に軍勢を動かす際、まず厳島に居るのは、軍事的に見て合理的な判断なのである。

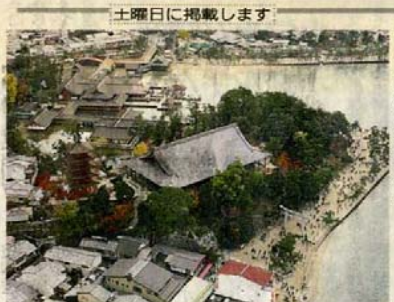
■祭祀の保障が義務
もう一つ重要なことは、厳島という島の政治的な意味合いである。厳島合戦の直前、厳島神社では秋の祭祀(現在の菊花祭)が執り行われていた。神社の祭祀の執行を保障

陶の厳島上陸 進軍上 合理的な判断

するとは、この地域の支配者の義務であり、自らの権力の正当性を示す機会でもあった。そのような意味においても、陶は祭祀を妨害することもできず、かといって厳島をいつまでも毛利に占領させておく訳にもいかなかったのである。ちなみに、陶が二十一日に上陸したのは、秋の祭祀が二十日に終了するのを待っていたからだと推測される。

■来援待ち望む毛利

もちろん厳島渡海は、陶にとって唯一の進路ではなかった。周防から安芸西部の山間地域に入って廿日市を目指すという進路も、軍事的には有力な選択であった。弘中隆兼によれば、厳島渡海を主張したのは、晴賢側近の三浦越中守、齋藤衆(水軍)、神領衆であり、隆兼本人は渡海には反対であったという。いずれにしても、渡海は最終的には晴賢の判断であり、決して元就の謀略に乗せられておびき寄せられた訳ではない。



土曜日に掲載します

陶晴賢が厳島に上陸して本陣を構えた宮崎山(現在の千疊閣・五重塔付近)

の屋根続きから城を攻撃した。城の防衛線である「尾頭之堀」を埋め立て、同時に「水之手」を掘り崩そうとした。二十七日には「尾頭之堀」はほとんど埋まり、城はもはや風前の草もひびくたつた。元就が待ち望んでいたのは、来島村上氏の来援であった。(秋山伸隆・栗立広島大教授)